

●せいいてん質問箱

# 「本願成就」とは、どういふことか？

●質問

本願が成就したと説かれて  
いるのに、迷っている人がい  
るのはなぜですか？

□諸仏の誓願と弥陀の本願

阿弥陀仏の四十八願において  
は、そこに示された内容が成就  
しなかったならば「正覚（さと  
り）を得ないと誓われています。  
とくに本願（第十八願）では、  
たとひわれ仏を得たらん  
に、十方の衆生、至心信  
樂してわが国に生ぜん」と欲  
ひて、乃至十念せん。も  
し生ぜずは、正覚を取ら  
じ。ただ五逆と誹謗正法  
とをば除く（十八頁）

とあり、私たちが救われる（浄  
土に往生する）ことがなくては  
正覚を得ないと誓われているこ

とに、如来のたいなる慈悲の心  
を見るのです。

しかし、誓願を立ててその内  
容が成就しなければさとりを得  
ないと誓うのは阿弥陀仏に限っ  
たことではありません。

ご存じのとおり、仏典にはさ  
まざまな仏が説かれます。そし  
てその仏は因位の菩薩のときに  
それぞれに個別の誓願（別願）  
を立てるのであり、またすべて  
の菩薩に共通する願いすなわち  
総願（四弘誓願）を満足して仏  
になるといわれます。その総願  
の第一は、「衆生無辺誓願度」  
といわれる利他の誓いであり、  
限らない衆生をすべて救いどる  
ということが誓われているので  
す。

また、例えば『阿闍梨国経』  
では、願の内容が成就しなければ

ば（相應する行を修めなければ）  
諸仏如来を欺くことになる  
という表現で、阿闍梨の願の  
成就に対する決意が示されてい  
ます。これは表現は異なります  
が、四十八願に示された「正覚  
を取らじ」に共通するものとい  
えるでしょう。

そうしたことを了解した上で  
もなおこのような問いがなされ  
るのは、私たちが浄土に往生す  
るといふことが、そのまま私た  
ちが迷いの世界を離れることに  
他ならないからでしょう。つま  
り、阿弥陀仏の本願の成就とい  
うことが、私たちの問題と直結  
しているからに他なりません。  
そして、現にこの私はまだ迷  
いの世界にあり、往生の素懐を  
遂げているわけではありません  
し、まわりを見渡してみても、  
往生していない人ばかりです。  
すでに法蔵菩薩は本願を成就  
し、阿弥陀仏となられているの

に、十方衆生がまだ往生して  
いないのはなぜか、というのが  
この問いの内容です。

□総願と別願

阿弥陀仏に限らず、すべての  
仏は総願において、限らない衆  
生をすべて救いどるといふこと  
を誓われています。しかしなが  
らやはり迷いの世界にとどまっ  
ているものは限りなく存在して  
います。これはどういふことで  
しょう。あらためて総願の第一  
を見てみますと、無辺の衆生を  
救い取ると誓われていますが、  
どのように救うのか、あるいは  
どのような衆生を救い取るのか  
ということが述べられているわ  
けではありません。実はそのこ  
とを示すのがそれぞれの仏  
に個別の誓願すなわち別願であ  
り、阿弥陀仏の四十八願も別  
願といわれるものに他なりません。  
別の言い方をすれば、総願  
は「仏とはどのような方か」と

いうことを示すものであり、別  
願は「どのような個性の仏か」  
ということを示すものであると  
もいえるでしょう。つまりどの  
ように衆生を救うのかというこ  
とが「どのような個性の仏か」  
ということなのです。

□本願に出遇うということ

阿弥陀仏の本願には、「十方  
の衆生、至心信樂してわが国  
に生ぜん」と欲ひて、乃至十念  
せん。もし生ぜずは」と誓われ  
ていました。これが阿弥陀仏は  
どのように衆生を救うのかとい  
うことを示す内容です。すなわ  
ち、本願を信じ念仏するものを  
救い取る仏、それが阿弥陀仏と  
いふ仏であるということでは  
本願に出遇い、疑うことなく信  
じるものを、阿弥陀仏は他に条  
件をつけることなく救い取っ  
てくださるのです。そのことを私  
たちはよく「このままで救われ  
る」といいますが、それは、本

願に出遇い、疑うことなく信じ  
るものに対していわれることで  
す。それは法然聖人が『選択  
本願念仏集』に、  
まさに知るべし、生死の  
家には疑をもつて所止と  
なし、涅槃の城には信をも  
つて能入となす  
（七祖一四八頁）

といわれ、また親鸞聖人が『教  
行信証』の総序に、  
ああ、弘誓の強縁、多生  
にも値ひがたく、真実の浄  
信、億劫にも獲がたし。た  
またま行信を獲ば、遠く  
宿縁を慶べ。もしまたこ  
のたび疑網に覆蔽せられ  
ば、かへつてまた曠劫を経  
歴せん  
（二二三頁）

□往生と正覚

この問いは、「迷っている人  
がいるのはなぜですか」という  
ものですが、私のことに置き換

えてみれば、阿弥陀仏は十劫の  
昔に本願を成就して仏となられ  
たのに、なぜ私はこれまで迷い  
の世界にいたのか、ということ  
でしょう。善導大師が、  
自身は現にこれ罪悪生死  
の凡夫、曠劫よりこのかた  
つねに没しつねに流転し  
て、出離の縁あることな  
し  
（七祖四五七頁）

と述べられているように、私は  
阿弥陀仏が十劫の昔に本願を成  
就したにもかかわらず、迷いの  
生涯を繰り返してきたのです。  
阿弥陀仏の本願は十劫の昔より  
ずっと私をよび続けてくださっ  
ていたのに、ずっと背を向け続  
けてきたのです。親鸞聖人が「あ  
あ、弘誓の強縁、多生にも値ひ  
がたく、真実の浄信、億劫にも  
獲がたし」といわれているのは、  
私を救い取る法はすでに成就し  
ているにもかかわらず、それに  
出遇うことができないでいた私

の姿そのものなのです。しかし  
そんな私を如来の大悲はずっと  
照らし続けてきてくださったの  
です。「遠く宿縁を慶べ」とは、  
この本願に出遇えたこともま  
た、宿縁すなわち過去世より断  
えることなく私に向けられてき  
た如来のはたらきであったと知  
れということなのです。

本願が成就したときより、如  
来はずっと私にはたらき続けて  
おられたのであり、私が今、信  
心を得てお念仏申しているの  
も、すでにその如来の撰取のう  
ちにあつたからなのです。しか  
しそう信知することができないの  
も、今、本願に出遇えたからに  
他なりません。そこには本願に  
出遇えたことよろこびととも  
に、本願が成就しているにもか  
かわらず、それに背を向けて流  
転し続けてきたことに対する慚  
愧もあるように思います。  
（本願寺派司教 安藤光慈）